浮世絵展示を活用した
アクティブラーニング
――中央大学教育力向上推進事業活動報告――

都　筑　　学

1．はじめに

近年，高等教育において，アクティブラーニングへの関心が非常に高まっている。「アクティブラーニング」という用語が含まれる CiNii 収録論文数を検索した山内（2018）によれば，2008 年には年間 5 本しかなかったが，2012 年を境に論文数が増加していき，2017 年には年間 968 本にもなっているという。このような状況が生まれた背景には，中央教育審議会（2012, 2014）の答申や教育再生実行会議（2015）の提言が，大学教育において，学生が主体的に問題を発見し解決策を見出していくアクティブラーニングの重要性を指摘したことがある。

アクティブラーニングは，溝上（2014）によって，「一方向的な知識伝達型講義を聴くという（受動的）学習を乗り越える意味での，あらゆる能動的な学習のこと。能動的な学習には，書く・話す・発表するなどの活動への関与と，そこで生じる認知プロセスの外化を伴う。」と定義されている。能動的な学習には，教室内でのグループ・ディスカッションのようなものから，教室外でのプロジェクト・ベースト・ラーニング（PBL）や問題解決学習・問題発見学習のようなものまで，さまざまな形態の協同学習が含まれる。

本稿では，アクティブラーニングの一つとして筆者が 3 年間（2016 ～ 2018 年度）にわたって実施責任者となった「浮世絵展示を活用したアクティブラーニング」（中央大学教育力向上推進事業）の活動内容と成果をまとめて報告する。

以下の節では，まず，本事業の目的と計画立案過程について紹介する。次に，3 年間実施した事業内容について，浮世絵展覧会の準備過程と会期中の活動内容について紹介する。最後に，本事業を通して得られた成果と今後の課題について述べる。

2．本事業の目的と計画立案過程

中央大学教育力向上推進事業は，学内の競争的資金であり，申請して採択されれば，2 年間または 3 年間の予算措置がなされる。本事業の計画申請は 2015 年夏であり，筆者が文学部長を務めていた時期（2013 年 11 月 ～ 2017 年 10 月）であった。発達心理学を専門とする筆者が，専門外の浮世絵に関する事業の実施責任者になったのは，文学部長として，文学部における特色ある教育活動を展開したいという思いがあったからである。

本事業を企画した背景には，先に述べたような大学教育におけるアクティブラーニングの重要性に関する国レベルでの指摘があった。その一方で，主体的・能動的な学びによるアクティブラーニングを実際に展開していくためには，それを具体的に支えていく人的・物的なリソースに関する一定の蓄積が必要である。そこで着目したのが，これまでに中央大学のさまざまな企画で活用されてきた浮世絵であった。その内容は以下のとおりである。

2009 年に，中央大学創立 125 周年記念特別展として「浮世絵百華」（公益財団法人平木浮世絵財団所蔵の浮世絵を展示）を開催し，江戸時代の文化・書籍に造詣が深い，文学部国文学専攻の鈴木俊幸教授が展示監修を務めた。2014 年度から大学院文学研究科に「浮世絵学」（半期科目）が設置

され，公益財団法人平木浮世絵財団の浮世絵専門の学芸員が授業を担当していた。文学部との協定校であるイギリスのセインズベリー日本藝術研究所において，2015 年 4 月に，浮世絵ワークショップが開かれて，鈴木俊幸教授と平木浮世絵財団の松村真佐子学芸員が参加し，その成果が出版されていた（鈴木，2017）。中央大学図書館には，本学の卒業生であるジャーナリスト長谷川如是閑が所蔵していた「錦絵本」が寄贈されており，図書館での展示がおこなわれていた。

このような浮世絵に関する蓄積にもとづいて，本事業では，浮世絵専門の学芸員の教育的な指導のもとで，浮世絵に関する講義と浮世絵の展示を有機的に関係づけたアクティブラーニング環境を構築することによって，学生に対して，以下のような多様な学びの機会を提供することを計画した。

① 浮世絵に関する基本的な知識
② 浮世絵を含む自文化に関する全般的な理解
③ 浮世絵展示の企画・実施（テーマ設定，展示解説・図録解説執筆，展示・撤収作業など）
④ 浮世絵展示の広報（ポスター作成，広報など）
⑤ デジタル教材の作成（浮世絵のデジタル化作業）

このような活動を通して，自文化の歴史と伝統への深い認識をもち，それを積極的に発信できるような人材を育てることを本事業の目的とした。

3．本事業の内容

本事業の実施に際しては，文学部提供課外プログラム「実践的浮世絵学」を新規に立ち上げ，受講生を募集した。募集期間は，2016 年度が 6 月，2017 年度が 5 月，2018 年度が 4 ～ 5 月だった。募集に際しては，説明会

を実施した。

「実践的浮世絵」は週1回の授業であり，2016・2017年度は後期に開講され，2018年度は前後期通年で開講された。内容は，以下のとおりである。

① 浮世絵の歴史・ジャンル・画工・出版等についての概説講義
② 浮世絵という文化財の扱い方についての解説
③ 展示テーマの決定と構成案の作成
④ 展示作品についての調査
⑤ 展示解説の作成，展示解説パンフレットの製作
⑥ その他展示に関わる諸要件（広報を含む）の整備
⑦ 展示場の設営，展示作業　解説パネル制作　エントランス・会場のディスプレイ
⑧ 展示の運営，記録，来場者数等の集計
⑨ 集計結果や来場者アンケートにもとづく総括

本事業の特徴は，課外授業として「実践的浮世絵学」を開講し，エントリーしてきた学生が浮世絵展覧会を実施したところにある。受講しても単位にはならない授業に参加して活動するという点で，正規の授業におけるアクティブラーニングとは異なっている。受講生には，いっそうの能動性や自発性が求められることになる。表1は，エントリーした学生数と展覧

表1　受講生の人数

年度	エントリー数	最終受講人数
2016	12	7
2017	16	11
2018	18	15

注）最終受講人数は，展覧会まで参加した学生の人数を示す。

会実施まで参加した学生数を年度ごとに示したものである。さまざまな理由で，途中で受講を取りやめる学生も出てきた。「単位」で学生を縛ることもできない。そのあたりが，課外授業の活動として展開していくときの難しさといえる。

本事業では，浮世絵についての学習と展覧会の実施という 2 つの異なる活動を組み合わせている。受講生は，中央大学多摩キャンパスにある文系 5 学部の学生である。浮世絵そのものに関心を持っている学生，展覧会での展示に興味を持っている学生など，受講の動機は多様である。ほとんどの学生は，浮世絵に関する知識は持っていない，言わば「初心者」であった。そのなかで，ある学生は，受講動機を次のように書いている。

「私が初めて浮世絵に関心を持ったのは小学校の浮世絵作り体験でした。その時に簡単な浮世絵を作りましたが，もっと本格的な浮世絵に触れ合いたいと思いました。今回のプログラムでは本格的に浮世絵に関わり合えるので応募したいと考えました。

また，私は歌舞伎が好きで，浮世絵を通して江戸時代の歌舞伎役者の素顔を知りたいと思いました。将来，歌舞伎に関係する仕事に就きたいと考えているので，少しでも江戸時代の歌舞伎について知りたいと思います。歌舞伎を鑑賞する上でも，いろんな知識があるとより楽しめると思うので，是非このプログラムを受講したいです。また，歌舞伎役者だけではなく，江戸の街並み，庶民の暮らし，江戸っ子の表情などを目で見たいと思います。私の所属する日本史学専攻は文字が書いてある文献をもとに調査しますが，浮世絵は文字ではなく，絵から景色や街並みなどいろんなことが読み取れます。江戸時代の職人からのメッセージを浮世絵から受け取り，日本史学の授業では普段できないことをこの講座でやりたいと思っています。

また，先日，江戸東京博物館に行き，浮世絵の展示を見てとても感動しました。もちろん博物館では浮世絵を触ることができません。ですが，このプログラムでは浮世絵に触れるだけではなく，実際に自分たちで展覧会を企画するという大きな仕事が待っています。このようなことは中央大学に所属しているときにしか出来ないと思うので，大学生活を有意義なものとするために受講したいと思います。」

エントリーして受講を認められた学生たちは互いに協力して，浮世絵に関する知識の学習（座学）と浮世絵展覧会の企画・立案・実施（実習活動）という 2 つの学習活動を結びつけ，浮世絵展覧会の開催という最終目標を目指していくことになる。学生たちは，学年も学部も異なっており，ほとんどが初対面だという関係にある。

年度ごとの授業の流れは，表 2 ～ 4 に示したとおりである。また，3 回の展覧会で制作したちらし，ポスター，図録および展覧会会場の写真は，後掲の資料に掲載してある。

2016 年度は，9 月の授業開始以降，座学と展覧会準備を同時並行的に進めていった。2 名の学芸員の方にリードしてもらいながら，学生たちは展覧会の企画内容を考えていった。平木浮世絵財団からお借りした浮世絵には，役者絵と美人画が含まれていた。それらの浮世絵を展示するにあたり，学生たちから出されたアイディアは，展示した役者絵と美人画のそれぞれについて，展覧会に来てくれた来場者にシール投票してもらい，順位を決めるというものだった。最終的に決まった展覧会テーマは，「浮世絵美男美女競（ミス・ミスターコンテスト）～あなたはダレ推し？」である。

ちらしとポスターに，役者絵と美人画の登場人物を取り出して配置するというアイデアも，学生の発案だった（写真 1）。図録に載せるキャプシ

表 2　2016 年度の授業内容

	月　日	内　容
1	9 月 21 日	ガイダンス（展覧会開催の流れ）
2	9 月 28 日	浮世絵の摺，ジャンル
3	10 月 5 日	調書のとり方（絵師，判型・種類，検印，版元）
4	10 月 12 日	担当する浮世絵の選択
5	10 月 19 日	作品の情報を読む，検印の時代区分
6	10 月 26 日	浮世絵の採寸
7	11 月 9 日	キャプションの書き方（着目点）
8	11 月 16 日	展覧会テーマ決定
9	11 月 30 日	展示する浮世絵の決定
10	12 月 7 日	ちらし・ポスター・図録の原案検討
11	12 月 14 日	展示会場の設営プラン検討
12	12 月 21 日	設営用備品の確認・発注，当番表作成
13	1 月 11 日	キャプション用パネル作成
	1 月 25 日	会場設営
	1 月 26 日	展覧会初日
	1 月 31 日	展覧会最終日
	2 月 1 日	会場撤収

表 3　2017 年度の授業内容

	月　日	内　容
1	9 月 25 日	ガイダンス（展覧会開催の流れ）
2	10 月 2 日	浮世絵の摺
3	10 月 9 日	浮世絵のジャンル，絵師
4	10 月 23 日	担当する浮世絵の選択
5	10 月 30 日	展覧会テーマの検討
6	11 月 6 日	会場設営案検討，役割分担（図録班，広報班）
7	11 月 13 日	図録・ちらし・ポスター制作
8	11 月 20 日	展覧会テーマ決定，図録・ちらし・ポスターの制作
9	11 月 27 日	図録・ちらし・ポスター制作
10	12 月 4 日	図録・ちらし・ポスター制作
11	12 月 11 日	図録・ちらし・ポスター制作
12	12 月 18 日	図録，ちらし・ポスター完成，当番表作成
13	1 月 15 日	会場設営プラン決定
	1 月 29 日	会場設営
	1 月 30 日	展覧会初日
	2 月 4 日	展覧会最終日
	2 月 5 日	会場撤収

表 4　2018 年度の授業内容

	月　日	内　容
1	6 月 4 日	授業の目的とスケジュール，自己紹介
2	6 月 11 日	浮世絵の情報を読み取る
3	6 月 18 日	浮世絵が出来るまで（版元・絵師・彫師・摺師）
4	6 月 25 日	浮世絵の歴史
5	7 月 2 日	絵師の系譜
6	7 月 9 日	浮世絵の時期区分（改印・極印の歴史）
7	7 月 16 日	浮世絵のジャンル（役者絵・美人画，風景画など）
8	7 月 23 日	調書のとり方
1	9 月 24 日	ガイダンス（展覧会開催の流れ）
2	10 月 1 日	担当する浮世絵の選択
3	10 月 8 日	役割分担検定（会場班，広報班，図録班）
4	10 月 15 日	班ごとの討論
5	10 月 22 日	班ごとの討論（展覧会概要，アピールポイント）
6	10 月 29 日	展覧会テーマ決定
7	11 月 5 日	図録構成決定
8	11 月 12 日	ちらし・ポスター原案決定
9	11 月 19 日	班ごとの討論
10	11 月 26 日	会場設営プラン検討
11	12 月 10 日	会場設営プラン決定，設営用備品の確認・発注
12	1 月 7 日	キャプション用パネル作成
13	1 月 28 日	会場設営
	1 月 29 日	展覧会初日
	2 月 3 日	展覧会最終日
	2 月 4 日	会場撤収

ョンも，学生が自分たちで考証して書いた。そのキャプションにキャッチコピーを付けるというアイデアも学生から出たものであり，例えば，「つい追いかけたくなる高嶺の花」「弱きを助け，強きを挫くナイスガイ」というような文字通りキャッチーで，来場者の耳目を引くものばかりだった。浮世絵にキャッチコピーを付けることは，次年度以降も引き継がれていった。

このように展覧会の基本的なプランについては，学生の意見が随分と盛り込まれた。他方で，ちらしやポスター，図録の制作作業の実務的な部分に関しては，学芸員の力を借りなければならなかった。その点では，課題

が残されたといえる。

2017 年度は，前年度の教訓を活かして，学生が自分たちでちらし・ポスター，図録を制作することに重きをおいた。平木浮世絵財団からお借りした浮世絵は風景画だった。学生たちの議論のなかで，江戸の名所と諸国の名所，明治時代の東京の名所をいかに組み合わせて展示するかが焦点になった。最終的に決定した展覧会テーマは，「浮世めぐり　～江戸からはじまる名所道中膝栗毛」である。江戸の名所をめぐった後に，諸国の名所をめぐり，最後に東京に戻ってくるという空間と時間の旅を楽しむという趣向である（写真 2，3）。

学生は，広報班（ちらし・ポスター制作担当）と図録班の 2 つに分かれ，大学で用意したパソコンのパワーポイントを使って，ちらし・ポスター・図録を自作した。いずれも独創的なアイデアに富んだものとなった。準備したポスターは，A0 サイズで発注したつもりだったが，届いたポスターは B0 サイズだった。この特大サイズのポスターを学内に掲示したところ，大きな反響があった。

広報活動にも力を入れ，「実践的浮世絵学」のツイッターのアカウントを作り，展覧会準備の進行状況をツイートしたり，八王子市の広報のイベント欄に開催記事を掲載してもらったりした。また，大学の広報室を通してプレスリリースもおこなった。その結果，ケーブルテレビ JCOM（八王子）のディリーニュースで展覧会の様子が紹介された（2018 年 2 月 2 日放映）。展覧会終了後には，FM ラジオ局八王子エフエムの「ハチエフキャンパストピックス」（2019 年 3 月 19 日オンエア）に筆者がスタジオ出演し，展覧会の様子を紹介した。

2018 年度は，通年で授業をおこなった。前期は，筆者が浮世絵の基本

的な知識について 8 回の講義を担当した。後期は，会場班・広報班・図録班の 3 つのグループに分かれて活動した。平木浮世絵財団からお借りした浮世絵は，おもちゃ絵だった。細工物（組み上げ絵，着せ替え絵），もの尽くし・絵解き，双六の 3 種類が含まれていた。学生たちは，ワクワクして楽しめる展示にしたい，来場者が手に取って遊べる企画にしたいと，いろいろなアイデアを提案した。最終的に決まった展覧会のテーマは，「来て！見て！　遊べる！？　浮世絵横丁　～あなたの知らないおもちゃ絵の世界」である（写真 4，5）。

全体としては，2 つの会場を横丁に見立てて，そこに飾ってある浮世絵を来場者に気楽に楽しんでもらうというアイデアである。にぎやかな和楽器の演奏曲を流すということも提案され，実際に会場で音楽が流された。

展示方法についても，アイデアが出された。一つは，組み上げ絵のコピーを実際に切り貼りして組み立てた実物展示であり，三枚組の「秀郷蜈蚣ヲ射ル図」を 10 倍に拡大印刷したものを段ボールで裏打ちして制作された。もう一つは，双六のコピーを用意して，それで遊んでもらうというものである。そのために，双六に書かれているくずし字を読み下したものが用意された。図録についても，「ワチャワチャした」遊び心満載の楽しいものを目指した。ポスターは，浮世絵横丁の朝昼晩の異なる雰囲気を出すために，同じデザインで色合いの異なる 3 つのバージョンが制作された。

広報活動に関しては，2017 年度と同様に，「実践的浮世絵学」のツイッターによる発信と八王子市広報イベント記事への掲載をおこなった。広報室を通じたプレスリリースもおこない，ケーブルテレビ JCOM（八王子）ディリーニュース（2019 年 1 月 31 日放映）で，展覧会の様子が紹介された。『朝日新聞』東京版 1 月 25 日朝刊，『東京新聞』1 月 26 日朝刊においても，展覧会の開催記事が掲載された。また，展覧会の開催期間中に 2 つの新聞社の取材を受け，『朝日中高校生新聞』2 月 10 日号「遊べる浮世絵の世界

をつくる」,『毎日新聞』2 月 19 日夕刊キャンパる（学生記者）「遊びながら『日本』学ぶ」の記事として掲載された。

4．本事業の成果

4.1　展覧会の開催

3 回の展覧会の会期，来場者などは，表 5 に示したとおりである。第 1 回では，日曜日には展覧会を開かず休みにしたので，会期は 5 日間だった。第 2 回，第 3 回の会期は 6 日間である。平均すると，1 日当たり 50 人から 60 人の来場者があった勘定になる。朝の 11 時から午後 5 時まで，展覧会は開かれていたので，1 時間にすると 10 人ぐらいの来場者となる。会期中の受付は，2 時間を単位として，受講生が 2 人一組になり，交代でシフトを組んで対応した。第 3 回は，会場が 2 つに分かれていたので，3 人一組で対応した。

表 6 に示したのは，来場者の内訳である。これを見ると，回数を経るごとに，来場者のうちで学生が占める割合が減少している一方で，学外者の

表 5　展覧会の会期，テーマ，会場，来場者数

	会　期	会　場	来場者数
第 1 回	2017 年 1 月 26 日～ 31 日	3105 号室	249 人
第 2 回	2018 年 1 月 30 日～ 2 月 4 日	3105 号室	324 人
第 3 回	2019 年 1 月 29 日～ 2 月 3 日	3104，3105 号室	321 人

注）　第 1 回は，日曜休みのため開催は 5 日間。

表 6　展覧会の来場者の内

	学　生	教職員	学外者	計	来場者数
第 1 回	81（61.8%）	39（29.8%）	11（ 8.4%）	131	249
第 2 回	99（44.4%）	64（28.7%）	60（26.9%）	223	324
第 3 回	54（35.3%）	52（34.0%）	47（30.7%）	153	321

注）　計は，属性について回答した人数を示す。%は，計に占める割合を示す。

表7　展覧会を知ったきっかけ（複数回答可）

	友人・知人	チラシ	ポスター	ホームページ	ツイッター	八王子広報	その他	回答者数
第1回	43 38.1%	56 49.6%	—	14 12.4%	10 8.8%	—	23 20.4%	113
第2回	91 39.6%	49 21.3%	92 40.0%	32 13.9%	14 6.1%	2 0.9%	32 13.9%	230
第3回	60 38.2%	33 21.0%	72 45.9%	14 8.9%	18 11.5%	4 2.5%	17 10.8%	157

注）第1回のアンケートでは，「ポスター」「八王子広報」の項目はなかった。%は，回答者数に占める割合を示す。

占める割合が増加していることが明らかである。継続して展覧会を開催することによって，学外にも少しずつ浸透してる様子が伺われる。

表7には，展覧会の開催を知ったきっかけを示してある。友人や知人から聞いたり，ポスター・ちらしを見たりすることで，展覧会を知ったという来場者が多いことが分かる。ちらしは学内の図書館，学部事務室に置くだけでなく，近隣地域の公共施設（図書館や公民館など）にも配布したので，それを見て展覧会にやって来た学外者もいた。その他のなかには，新聞に掲載された開催記事を見たり，ケーブルテレビの放映を見たりした学外の来場者もいた。これらの結果には，幅広い広報活動の成果が現れていると考えられる。

展覧会の開催は，後期の授業終了後の期間であり，決して良い条件とは言えない時期であった。それでも，学外からの来場者を含めて，一定数の来場者を集めることができたといえるであろう。

本事業で実施した浮世絵展覧会は，通常は授業で使用する講義室（60人教室）にパネル（縦180センチ×横90センチ）を連結して立て，そこに額装した浮世絵を展示していくというものであった。パネルの設置は，

庶務課に依頼しておこなってもらった。額装や展示作業は，学生たちが自分でおこなった。資料に示したのは，額装や展示作業の様子を撮影した写真である。

額装は，最も気を遣う作業の一つである（写真 14）。一つ一つの浮世絵の大きさに合わせてマットを切り抜いていく。額に入れたときに，左右や上下のバランスが取れていて，美しく見えるようにするには，細心の注意が必要である。額のなかに浮世絵を収めていく作業も，実際おこなってみると，裏返しの状態の浮世絵を額に入れていくので，簡単にはいかない。パネルの穴を利用してワイヤをパネルに固定する作業も，水平器を使っておこなう。浮世絵を横一直線に見栄え良く並べていくには結構な時間がかかる（写真 15）。学生たちは，こうした展示作業を一つひとつ進めていくなかで，自分たちが日頃出かけて行って見ている展覧会の裏側を知ることになるのである。

また，講義用の教室を展覧会の会場にするためには，創意工夫が求められる。パネルの配置も，それぞれの展覧会の内容に即して，少しずつ変化させていった。第 2 回の展覧会では，最初の段階では，自作の顔出しパネルを用意して，来場者に写真撮影をしてもらうことになっていた。ところが，発注して届いたものは，予定より相当大きなものだった。急遽，それを三枚並べて，写真撮影スポットとして設営し，来場者に自由に写真を撮ってもらうことにした。このような臨機応変の対応も，展覧会のなかでは求められるのである（写真 6 ～ 12）。

4.2　学生たちの活動

本事業では，文学部提供課外プログラムという位置づけで「実践的浮世絵学」を開講し，文系 5 学部の学生が参加して，3 回の浮世絵展覧会を実施した。第 3 回の展覧会の終わった後に学生が書いた感想を一つ紹介したい。

「来場者（特にご年配の方）が目をキラキラさせて，おもちゃ絵を体験し，とても楽しそうにお帰りになられる姿を何度も見かけることが多く，そのことで今回の展覧会をやって良かったと思いました。初めてこの授業に参加した時から，ただ普通の美術館のように作品を遠くから眺めるのではなく，可能な限り積極的に作品へ鑑賞者側からアプローチし，作品との出会いを記憶に残してもらえるような展覧会を目指していました。昨年はあいにく参加出来ませんでしたが，3年目でその思いが成就したように思います。展覧会以降，私たちが卒業した後に図書館で組み上げ絵の実際に組み立てた作品の展示がされるのがその証です。本当にうれしいです。専門家の方から考えればイレギュラーでありえないということもあったと思いますが，学生の立場を最大限に生かした展覧会が出来ました。」

本事業でおこなった浮世絵展覧会は，この学生が述べているように普通の展覧会とは異なり，学生ならではの感性や能力を活かして実施したものであった。週1回90分の授業時間内では作業は終わらず，授業時間外にもLINEでの連絡調整や作業を進めていた。展覧会の準備が後期試験日程と重なったり，留学に出発する期日が迫っていたりするなかで，学生たちは展覧会の成功を目指して活動した。単位にはならない「実践的浮世絵学」ではあったが，それゆえに創意工夫を発揮できる余地も大きく，学生は多様な活動を経験することができたといえるだろう。

5．ま　と　め

本事業は，役者絵・美人画，風景画，おもちゃ絵という異なるジャンルの浮世絵を展示した3回の展覧会を実施して終了した。このような事業を進めていくには，結構なエネルギーが必要である。学生たちの意欲と行動力が，本事業を進めていく何よりの力となった。同時に，財政的援助も必

要である。予算的な裏付けがあったからこそ，平木浮世絵財団の学芸員の力を借りることができたし，何よりも，本物の美術品としての浮世絵をお借りすることができた。学外との連携なくしては，本事業は実現できなかったのである。

本事業は，筆者にとって，浮世絵について学ぶ絶好の機会となった。1年目には，大学院科目「浮世絵学」を学生と一緒に受講し，浮世絵に関する基本的な知識をある程度習得した，また，3回のすべての展覧会の準備過程において，「実践的浮世絵学」の受講生と一緒になって，浮世絵のキャプションを書いたり，展示作業をおこなったりした。3年目の前期には，浮世絵の講義も担当した。今まで知らなかった浮世絵の世界を知り，その魅力を肌で感じることができた。本事業は，筆者にとっても大きな意味を持っていたといえる。

本事業では，2人の学芸員が授業を担当し，筆者はTA（ティーチング・アシスタント）兼渉外担当（文学部事務室との連絡）という位置づけだった。通常の授業における教師という立ち位置とはやや異なる所にいて，「実践的浮世絵学」に関わっていた。こうした経験も，貴重なものだった思う。

先ほど紹介した学生の感想にもあったように，組み上げ絵「秀郷蜈蚣射ル図」の実物は，2019年4月から5月にかけて，中央図書館4階閲覧室において展示された（写真13）。平面に描かれた浮世絵が立体として浮かび上がってくるのは，摩訶不思議である。本事業は3年間で終了したが，その成果がいずれかのときに再び立ち現れてくることを願っている。

謝　辞

本事業を進めるにあたり，公益財団法人平木浮世絵財団佐藤光信理事長，森山悦乃主任学芸員，松村真佐子学芸員，中央大学文学部鈴木俊幸教授には，多大なるご理解とご協力をいただきましたことを心より感謝申し上げます。

引用文献

中央教育審議会（2012）新たな未来を築くための大学教育の質的転換に向けて～生涯学び続け，主体的に考える力を育成する大学へ～（答申）
中央教育審議会（2014）新しい時代にふさわしい高大接続の実現に向けた高等学校教育，大学教育，大学入学者選抜の一体的改革について（答申）
教育再生実行会議（2015）これからの時代に求められる資質・能力と，それを培う教育，教師の在り方について（第七次提言）
溝上慎一（2014）アクティブラーニングと教授学習パラダイムの転換 東信堂
鈴木俊幸編（2017）出版文化における浮世絵　勉誠出版
山内祐平（2018）教育工学とアクティブラーニング 教育校学会論文誌　DOI:10.15077/jjet42125

資　　料

写真１　ちらし表裏（第１回）

写真２　ちらし表裏（第２回）

写真３　ポスター（第２回）

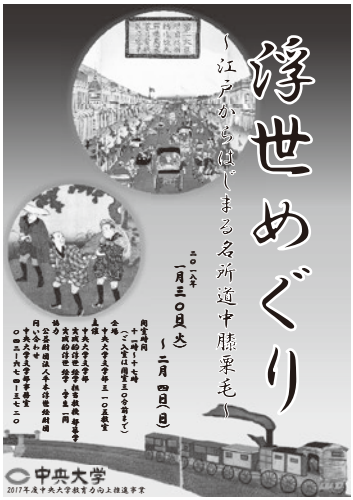

写真４　ちらし表裏（第３回）

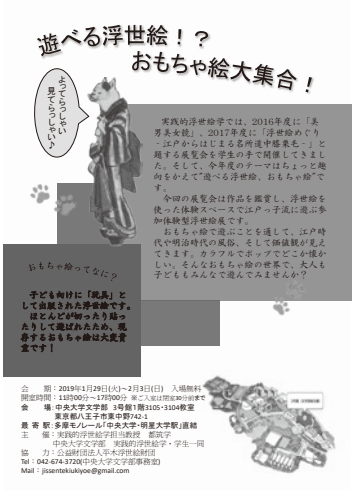

写真 5　ポスター（第 3 回）

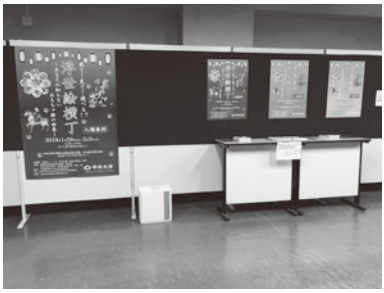

写真 6　図録（3 種類）

写真 7　会場風景（第 1 回）

写真 8　会場風景（第 2 回）

写真 9　会場風景（第 3 回）

写真 10　美男美女競シール投票（第 1 回）

写真 11　写真撮影スポット（第 2 回）

写真 12　双六体験コーナー（第 3 回）

写真 13　秀郷蜈蚣射ル図（図書館展示）

写真 14　額装作業（第 3 回）
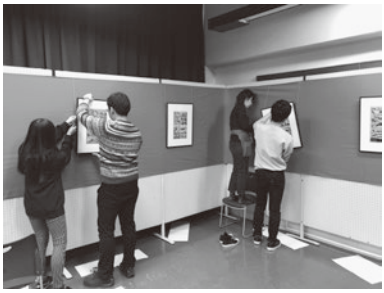
写真 15　展示作業（第 3 回）